

京都の空襲・学徒動員・工場疎開

田 中 はるみ

はじめに

太平洋戦争末期、アメリカ軍による日本本土空襲は激烈を極めた。東京、横浜、名古屋、大阪、神戸と次々に大都市は廃墟と化していき、中小都市も爆撃にさらされていた。

その中で、京都は「極部的ナ被害ノ中ニ終戦トナリタル」①状況で、ほかの大都市とくらべて被害が少なく、焼け残った都市の代表といえる。

では京都の空襲は、アメリカ軍による日本本土への戦略爆撃の過程でどのように位置づけられるのか。上空の意図と地上の体験は一致するのか。アメリカ側の資料と日本側の資料を検討することで、京都の空襲の実相にせまってみたい。

本稿でいう京都の範囲は、京都市と当時洛南とよばれていた京都府南部地域である。

ここ十年來の京都空襲論、京都の空襲研究における欠陥をよく表している例として、一九四五年六月二六日の空襲をあ

げることができる。この日の空襲は、京都が当初からの爆撃目標であったとする説は、容易に消滅しないようである。

最近では『朝日新聞』（南京都版）一九四四年八月二〇日付で「通説を覆す『西陣空襲』」として、次のような記事が掲載されている。

「文化財を守るため、京都は爆撃目標にならなかった。信じられてきた説を覆す資料がある。『東京大空襲戦災誌』に収められている米国第二〇航空軍司令部の文書だ。それによると、四五年六月二五日午前零時四〇分（米軍使用時刻、日本時間では二六日午前九時四〇分）、目標を京都に設定したB 29一機が高性能爆弾七発、七トンを投下した。

これは、明らかに誤りである。『朝日新聞』のいう資料とは、第二〇航空軍が作成した「日本本土爆撃詳報・地域別」（『東京大空襲戦災誌』第三巻所収、一九七三年）のことであるが、これは、第一目標、第二目標、最終順位目標、臨機目標の別なく、B 29の搭乗員が投弾したと報告した地域名が

記されているのである。本土爆撃を日付順に記載した「日本本土爆撃概報・日付順」(『同右書』所収)には、六月二六日、京都への爆撃の記録はない。第一目標のみに限定した資料だからである。なおこの誤りは、吉田守男「京都小空襲論」(日本史研究会『日本史研究』二五一号所収、一九八三年七月)に端を発したものであり、さらに小林啓治・鈴木哲也『かくされた空襲と原爆』(機関紙共同出版、一九九三年)へと引き継がれた。六月二六日の空襲が大空襲の付随的、投棄的爆撃であることは、本稿で明らかにしたい。

さらに四月一六日空襲の三菱重工業第十四製作所、七月二四日空襲の日本国際航空工業大久保工場に動員されていた少年少女たちの姿も掘りおこしてみたい。また三菱重工業、日本国際航空工業という軍需工場建設のために徴用された朝鮮人たちの姿にもふれる。そして京都の空襲で最も影響を受けた三菱重工業の工場疎開について、検討をおこなう。

一 空襲

「京都府当局は、一九四五年一月から八月にかけての一六の小空襲を報告した」として、米国防略爆撃調査団報告「京都における空襲防ぎよと関連事項に関する現地報告」^②に、次のような内容の一覧表が掲載されている。

京都府の空襲(京都北部、海軍基地のある舞鶴を除く)

- 1・16 二三時。B 29 一機、高性能爆弾およそ六〇と焼夷弾一。死亡三四人、重傷二三人、軽傷二三人。建物二棟全壊、二九棟焼失、二二棟一部火災。
- 1・29 二一時五分。B 29 一機、高性能爆弾五。死傷者なし。被害なし。
- 2・4 〇時三五分。B 29 一機、高性能爆弾およそ八三。死傷者なし。建物一棟全壊、一棟一部損傷。
- 3・19 七時。グラマンおよそ一九機、高性能爆弾一一。建物一棟全壊。死傷者なし。
- 3・19 七時三〇分。グラマンおよそ一四機、高性能爆弾一。重傷一人。建物一棟全壊。
- 4・16 一二時。B 29 一機、高性能爆弾七。死亡二人、重傷二人、軽傷三七人。被害なし。
- 4・22 九時五〇分。B 29 一機、銃撃。重傷二人、軽傷二人。
- 5・11 九時。数は未確認だがB 29 による銃撃。軽傷二人。
- 6・5 八時。B 29 一機、銃撃。死亡一人、重傷一人、軽傷七人。
- 6・9 九時三〇分。B 29 およそ一一〇機、銃撃。死亡一人。
- 6・15 B 29 およそ一五機、焼夷弾二〇九七。建物二五棟完全焼失。
- 6・26 九時四〇分。B 29 一機、高性能爆弾六。死亡四三人、

重傷一人、軽傷六三人。建物六五棟全壊、八四棟軽い損傷。

7・19 九時三〇分。P 51二三機、銃撃。死亡二人、重傷一人、軽傷六人。

7・24 七時五〇分。P 51およそ一五機、高性能爆弾四。死亡七人、重傷四人、軽傷一人。

第二波 P 51およそ一五機、高性能爆弾五。死亡七人、重傷二人、軽傷一二人。建物一棟全壊、二棟一部損傷。

7・28 一三時三〇分。P 51六機、銃撃。重傷三人。
7・30 一二時一三分。小型機およそ二〇機、銃撃。軽傷一人。

第二波 小型機八機、銃撃。死亡二人、重傷一人、軽傷一人。建物一棟一部損傷。

第三波 小型機一機、銃撃。軽傷三人。

第四波 小型機およそ一七機、銃撃。死亡一四人、軽傷九人。建物六棟完全焼失、二六棟軽い火災。

第五波 小型機一七機、銃撃。重傷二人、軽傷二人。建物一五棟完全焼失。

第六波 五機、軽傷二人。

第七波 七機、軽傷一人。

第八波 五機、軽傷一人。

第九波 一四五機、死亡二人。建物一棟完全焼失、二棟一部焼失、一棟全壊。

また日本側資料としては、京都府警察部警防課が一九四五年六月にまとめた「空襲被害一覧表」がある。これには、京都府当局が米国防略爆撃調査団に報告したとされる「京都府の空襲」の一覧表に記載のない一月三日、四月七日、六月一日の爆弾投下の記録が残っている。空襲時刻・被害状況についても内容が異なる場合がある。今までの京都空襲研究者は、もっぱらこの府警防課の一覧表を引用している。そして、米国防略爆撃調査団報告の方を見ていない。だが、アメリカが戦略爆撃の効果进行调查していた時期に、京都府当局がこのような空襲の報告をしていたのは事実なのである。

米国防略爆撃調査団報告「大阪、神戸、京都に対する空襲の影響」^④には、京都への空襲について、アメリカ側としては「航空写真を撮影する任務以外、京都への空からの軍事行動の計画はなかった。しかし偶然の事故によるものか航空上のトラブルによるものかわからないが、いずれも単機によって、死傷者を出し、建物を破壊する爆弾投下が三度あった」として、一月一六日、四月一六日、六月二六日の空襲にふれている。

アメリカ軍の当初の意図とは関係なく、偶発的に行われたとされる空襲について、四月一六日、六月二六日の両空襲の

検討をしてみよう。ほかに当時、洛南とよばれた京都府南部への空襲についても考察する。なお、一月一六日の空襲は、心理的効果をねらった単機による夜間爆撃の一例と思われる。一二月の時期、大都市地域を対象に盛んに実施された爆撃であって、正規の作戦任務 (Mission) として扱われていない。一月二九日と二月四日の夜間爆撃も同様であろう。

1 四月一六日の空襲

京都府警防課作成の「空襲被害状況一覧表」によると「四月一六日正午、右京区太秦巽町第十四製作所外四ヶ所に二五〇kg爆弾一〇発投下。死者二、重傷一一、軽傷三七、合計五〇、半壊住家三、第十四製作所内工作機械八台、修理機械其他十台破損セリ」となっている。

ではアメリカ軍は、この空襲をどのように考えていたのであろうか。

米国戦略爆撃調査団報告の「三菱重工業会社」によると「第十四製作所に対する空襲に関しての詳細は、日本の情報からのみである。連合国は、この工場への空襲は記録していない。日本側が空襲があったとする一九四五年四月一六日に唯一記録されているその地域への任務は、第二〇航空軍の単機による神戸への空襲である。そこは六〇マイル離れており、三トンの高性能爆弾を投下した」と記している。

B 29 による本土空襲の全出撃記録が載っている「連合国軍及米航空軍攻撃データに関する嚴重秘扱い統計報告書」一九四五～四六年、計五〇冊の神戸の項をみると、四月一六日、B 29 一機が二五〇キロ爆弾三個を投下したことになっている。しかし、これはグリニッジ時間である。『神戸市史 第三集』社会文化編（一九六五年）掲載の「神戸市空襲状況一覧表」には、四月一七日午前八時九分、B 29 一機が兵庫区和田岬・同海面に投弾と記されており、この記録と一致している。⑦。ほかに四月一六日に爆弾投下の記録があるか調べたが、未確認 (Unknown) 地区にもそれらしいものはなく、京都への空襲については全く不明のままである。

また日本側の記録には「太秦警察署屋上に設けられていた望楼で監視中の土手敏男さん（農業）は、午前一二時頃東北から南西に向う B 29 爆撃機一機を発見した」となっていて、神戸の空襲とは、方向から考えて逆であり、その関連性には疑問が残る。

一九四七年五月刊行の米国戦略爆撃調査団報告「日本の航空機工業」の「間接攻撃記録表」(日付順) には、四月一六日、第一目標はあとづけられない (Not Traceable)、すなわち主目標不詳の爆撃が京都の三菱第十四製作所に中程度の被害を与えたと記している。

ともかく攻撃目標ではなかった京都への爆弾投下について、

翌日の『京都新聞』は「見直せわが家の防空 敵機来るとも揺がぬ護りを 再び京都府下へ投弾」という見出しで、「それは盲爆ではない。晴天のもと的確に京都府下を狙ったものである。このコースを知った敵は今後重ねて京都府下への来襲を繰返すものと見なければならぬ」と、アメリカ軍の意図的空襲であると断定し、市民に警告していたのであった。

一二時七分から五分間続いたという爆撃で、第二機械工場は三個の高性能爆弾の直撃を受け、爆破と火災により三〇％のダメージを受け、生産活動はすべて停止した。これは「日本の全航空機生産の問題にとって特に重要であった」工場、航空機工業の「鍵となる工場のひとつ」(One of the key plants)とみなされていた第十四製作所にとって大打撃であった。なぜならこの工場で一九四四年一月には、航空機エンジンの排気弁の国内生産量の九〇％を生産していたからである。

排気弁は、ピストン・エンジンのピストンを動かすため、燃料ガスの圧力を調整するという大切な役目をもっていた。一九三五年頃までは、排気弁過熱による発動機の切損が原因で多くの空中事故をおこしていた。そこで三菱重工業では、排気弁の過熱を防ぐため、ソジウム入中空冷却式弁の研究を始め、一九三五年完成をはたし、以降、広く採用されることになり、製作を一手に引受けることになっていたのである。

その生産ができなくなるという、アメリカ軍には思わぬ成果をもたらすことになった空襲だったのである。

当時、京都市内にあった二つの三菱重工業の工場は、防空法にもとづいて防空計画を設定するように指定された施設には含まれていなかった。地上においても防空上の不備があり、上空でも予想しなかった第十四製作所への爆撃は、その後、急速なる工場分散を引きおこすことになるのである。

2 六月二十六日の空襲

これは、京都市への空襲で最も被害が大きかったものである。西陣警察署の記録によると「六月二十六日、九時四十分、西陣地区(上長者町通以南、下立売通以北、大宮通以西、浄福寺通以东)に五〇キロ爆弾七個落下。家屋全壊七十一戸、同半壊八十四戸、一部損壊百三十七戸、死者四十三名、重傷者十三名、軽傷者五十三名、被災者八百五十名」ということである。

それまでにない大被害を京都に与えたこの空襲は、どのようにしてもたらされたのだろうか。

六月からの中高度からの複数目標(軍需工場)に対する昼間精密爆撃をアメリカ軍は、エンパイア計画による攻撃と称し、六月二六日はその第四次であった。最大限の数の目標を攻撃するため、五〇〇機以上のB 29が明石から名古屋にいた

る地域に投入されたのである。一日のあいだに川崎航空機明石工場、大阪陸軍造兵廠、住友金属桜島工場、三菱重工業各務原格納庫、愛知航空機永徳工場など合計一〇工場を目標として、B 29部隊は爆撃をおこなったわけである。その二六日、京都にも投弾があった。アメリカ軍の報告書にはどのように記録されていたのだろうか。

マリアナ基地の第二爆撃機軍団司令部作成の「戦術作戦任務報告」(Tactical Mission Report)によると、愛知航空機会社永徳工場を第一目標(Primary Target)とした第三一二爆撃航空団(作戦任務第二二九号)の臨機目標(Target of opportunity)の中に京都の名がみえる。B 29一機が京都に七トンの爆弾を投下したと記してある。「統計概要」

(Consolidated Statistical Summary)の箇所には、グリニッジ時間〇時四〇分(日本時間九時四〇分)に高度二万三八〇〇フィートからB 29一機が、臨機目標、京都に爆弾を投下したと記されている。すなわち、愛知航空機会社永徳工場を爆撃目標として飛び立ったB 29部隊のうち一機が、何らかのトラブルによって途中で爆弾を投下しなければならぬ状況になり、やむをえず投弾したという記録なのである。六月二六日、京都は決して計画された爆撃目標ではなかった^⑩。

第三一二爆撃航空団の永徳工場爆撃部隊の臨機目標は、ほかに串本飛行場、穴喰、奈良、瀬田、伊良湖崎、愛知、浜松、

新宮、四日市、宇治山田、未確認(Unknown)であり、京都には臨機目標爆撃地区のひとつだったのである(奈良投弾の事実は、日本側では不明である)。

さて、地上ではこの空襲をどのように考えていたのだろうか。

翌日の『京都新聞』は「三度び京都盲爆 罹災者の救護も速やかに進み 現場に復讐の士気揚る 肝を据え備へよ次の大空襲に」の見出しで「二十六日朝、敵は京都に侵入、雲上から市の住宅地区を盲爆した。(中略)今回の空襲は視野が不明瞭であった関係から機影を捉へることは出来なかった」と記している。当日、京都市上空は雲がたれこめ、上空では視界がさぞ悪かったことであろう。しかも二万三八〇〇フィート(約七〇〇〇メートル)上空からの臨機目標爆撃である。まさに付随的、投棄的爆撃であった。

また被災地区の『出水校百年史』は、「これは後になって聞いたことですが、その日、米国爆撃機B 29は、六機編隊で紀伊半島より上陸して、目的地向かう途中、一機が日本軍の迎撃で傷められ、編隊からおくれて飛んでいたんですが、しだいに困難となり、かかえていた爆弾をやむなく落としていったということやそうです^⑪」と記している。二十数人の追想談から三人以上が合致する確実なものを選んでまとめた「ある被爆者の話」の中のこの文は、六月二六日の空襲の性

格をすでに京都市民がつかんでいたことをうかがわせるものである。

この日、阪神、中京地域の軍需工場に大爆撃が加えられたことは、新聞も報じており、当時の京都市民にとって周知の事実であった。

3 艦上機による洛南の空襲(七月二四・二八・三〇日)
太平洋第二空母任務部隊指揮官(第三八機動部隊指揮官)
「戦闘報告・一九四五年七月二日―八月一日対日作戦」(ジャップ本国島に対する事前侵入空襲主要報告)^⑧には、七月一日、レイテ湾から出撃したアメリカ海軍J・S・マッケイン中将率いる第三八機動部隊の八月一日までの戦闘記録が載っている。第三八機動部隊の航空機が一回の攻撃を遂行したとして、七月一〇・一四・一五・一七・一八・二四・二五・二八・三〇日、八月九・一〇・一三・一五日の記録を残している。

京都府南部地域への空襲があった七月二四・二八・三〇日の記録をみてみよう。

7・24 呉の海軍艦船、瀬戸内海の海軍艦船と商船、北九州、四国ならびに西部本州の航空機と飛行場

7・28 呉の海軍艦船、瀬戸内海の海軍艦船と商船、北九州、四国ならびに西部本州の航空機、飛行場と海軍基地

7・30 神戸、名古屋、舞鶴^⑨および東京南部地域の航空機、飛行場、海軍艦船と商船ならびに地上基地

七月二四・二八両日は、西日本地区の航空機、飛行場、海軍艦船、商船、海軍基地を目標としていた。三〇日は、本州の限定された地域の航空機、飛行場、海軍艦船、商船、地上基地への攻撃である。いずれの場合もグラマンF6Fなどの空母艦上機によるものであった。

このような第三八機動部隊の対日作戦の過程の中で、京都府南部地域への空襲がおこなわれたのである。

米国防略爆撃調査団報告「日本の航空機工業」の前掲表によると、七月二四日、田辺の市街(Town)を第一目標とした海軍機四機が京都の日本国際航空工業大久保工場に爆弾一トンを投下し、被害は「極小」であったと記している。七月三〇日は、大津の飛行場を第一目標に海軍機七機が爆弾二トン投下、大久保工場の被害は「極小」としている。航空機工業に限定した記録であるため、大久保工場以外の被害はわからないが、海軍艦上機による爆弾投下を裏づけるものである。さて日本側は、これらの空襲をどのように記録したのであるろうか。

まず『京都新聞』の見出しをみると、七月二五日付「京都南部に爆弾投下 一部では機銃掃射」、七月二九日付「洛北で鬼畜の銃撃 敵小型機、新市内とても心許すな」、七月三

一日付「休養も戦力 元気で戦はう 勝ち抜く生活設計に万全を」となっている。二九日の記事の本文は「廿八日午後京都に侵入した敵小型六機は、洛北の住宅地区に鬼畜の機銃掃射を行ったほか、洛南の一部にも掃射を加へた（中略）京都の東北部から侵入して低空に舞下り、通行人に機銃弾を浴びせかけた」として、京都市北部地域にも銃撃があったと記している。三一日の記事は「敵の小型機は卅日も近畿地区に來襲、前日と同様の航路をたどって舞鶴地方を襲ったほか、京都市の南部地区にもロケット弾らしきものを投下した（中略）（二九日夜來単機又は数機毎に分散して侵入する」と、被害については、その軽さを強調しているが、艦上機の絶え間のない攻撃を「敵の來襲状況から判断しても狙ひとするのは国民から休養をとり上げんとする謀略」と表現するなど、アメリカ軍による空襲の激しさを語っている。

現実の被害は、二四日が久世郡大久保村（現、宇治市大久保町）にあった日本國際航空工業の工場で学徒動員の女生徒六人が死亡、宇治町（現、宇治市）の粟村鋳業所宇治工場で五人死亡、ほか民家にも投弾、二人死亡、負傷者が数人出たようである。二八日は「洛南地区では施設の一部に軽微な損害があったのみで人畜の死傷は皆無であった」という記事のほか、詳細は不明である。三〇日は、久世郡佐山町（現、久御山町佐山）の民家に投弾、二人が死亡、負傷者も出して

る。^{②③} また『奈良電鉄社史』によると「七月三〇日一二時二〇分、第一一八列車が敵機來襲の報をうけ、狛田駅に停車直後、艦載機の機銃掃射に遭い、車両に二〇余発被弾し、乗客に即死二名、重軽傷九名を出した。また同日、田辺車庫も銃撃を受け、車両二両が被弾したほか、三山木駅付近も銃撃を被り、踏切警手一名が殉職した」と鉄道をねらった機銃掃射があったことを記している。

京都府当局は、二四日、内政部長名で京都市、舞鶴市、東宇治町所在の学校長宛、通牒を出している。「学校防空防衛ノ件」として「戦局ノ急迫敵空襲ノ状況ヨリ勘案シ（中略）学校防衛ニ萬全ヲ期セラレ度」^②学校防空施設、防空要員について緊急に報告するよう求めたのである。二四日の艦上機による空襲は、京都府当局の動揺と緊張をまねくことになった。さらに三一日には、内政部長名で郡部国民学校長宛に「学校防空壕ノ完備等ノ件」を傳達している。「最近ノ頻発セル空襲情勢ニ対処シ学校防空壕等完備ノ要極メテ緊切ナルニ鑑ミ」^③学校防空対策状況報告を提出するよう、宇治、久世、相楽各地方事務所管内国民学校に求めたのである。

4 B 29の墜落（八月五日）

これも京都府南部地域への空襲であるが、他の空襲と違うのは、B 29の墜落に付随した事件であった点である。

六月六日付『京都新聞』記事は「目のあたり、敵機紅蓮の最後 京都上空制空陣の威力に揚がる歓声」の見出しで、

「五日早朝阪神地区を襲った敵機は、わが強力なる制空陣の威力の前に続々撃墜されたが、そのうち二機以上が京都上空において火を噴いて転落してゆく姿が見うけられ、憎むべき敵機の断末魔を目のあたりにして敢闘の防空陣からは“わッ”とばかりの快哉の声が湧き揚げた」として、京都の高射砲部隊による初めての戦果を記している。また一面には、写真入りで「洛南に醜態曝すB29」として、久世郡小倉村伊勢田（現、宇治市伊勢田町）に墜落したB29の無惨な機体の姿を載せている。

さらに翌日には「初弾、B29真二つ 洛南上空に初の大戦果」として、記者による高射砲部隊への訪問記事を載せ、B29墜落を市民の戦意高揚に利用していたのである。

六月五日、早朝から始まったB29による焼夷弾爆撃によって神戸は壊滅した。そして編隊を組んで脱去する際、そのうちの二機が火を噴いて墜落したのである。この二機は、一機は記事にあるように宇治市大久保の日本国際航空工業大久保工場の北にある麦畑に落ちたようである。もう一機については、当時直接には報道されなかったのであるが、戦後、数々の証言が出てきている。

代表として『田辺町近代誌』をみてみよう。

昭和二〇年六月五日朝八時四〇分頃大事件が起きた。B29が一機木津川の草内村の上空をかすめ、木津川に墜落し、大爆発がおこった。オレンジ色の炎はすさまじく、空には落下傘が数ヶ所にわたって舞い、追撃してきたわが国の戦闘機「飛燕」がその地点を旋回した。このB29は、神戸を空襲して高射砲の至近弾を受け損傷したもので、脚部を出していたから、木津川原に不時着を企てたことが明らかだった。（中略）墜落地点は、現在の山城大橋から約百メートル下流の青谷側の砂原であった。近隣から見物人が殺到し、憲兵がピストルを向け追い払うほどだった。（中略）落下傘で降下した三名の乗員は捕虜となったが、残りの乗員は惨死しており、これは近くの奈良島の深広寺で位牌をつくって供養した^②。

『かくされていた空襲』には、もと在郷軍人の証言として「落下傘で降りてきたのは皆、両手両足ひくくって、掲揚台にしぼりつけて、三人つかまえました。まもなく憲兵隊がきまして、身柄をわたしたんですわ。爆弾はB29がなんとか河原に着陸しようとして、重いものをみなすてたんやと思います^③」と記している。爆弾のひとつが多賀村（現、綴喜郡井手町多賀）の民家の石垣にあたって爆発し、近くにいた三人が怪我をしたという。この日、神戸空襲に加わったB29が搭載していたのは、E46（M69）、T4E4、M47、M17（M

50)であった。

落下傘で降下したB29の搭乗員に対しては、暴行の事実があったらしい。位はいについても、アメリカ軍の捕虜虐待の追及が厳しいことを予測し、戦後まもなくつくったようである。

さてB29が墜落したその日、京都府警察本部は、謀略ビラ、敵兵の処置、投下物の取締、敵機見物、服装、ラジオの配置の各事項について府民の協力を要望している。そのうち敵兵の処置、敵機見物をみてみよう。

敵兵の処置 敵機が撃墜され〇〇搭乗員が落下傘で降下する場合があるが、発見者は直ちに取押へる一方、警察・憲兵隊へ連絡して指示を仰ぎ、逃走防止の処置をとるべきであるがこの場合敵兵を殺傷することのないやう注意が肝要である。

敵機見物 府下で敵機の通過を漫然と見物してゐる者があって、落下物により負傷したが、敵機が頭上にある場合は監視員を除くほか全員退避しなければならない。

これは、明らかに伊勢田、木津河原のB29墜落事件を暗示している。京都で初めてB29が墜落した時の府民の対応に驚いた警察当局が急拠、府民に訴えたわけである。

二 学徒動員

表1 空襲被災工場の学徒動員

種 別	割当数	動員数	学校名	学年	人数	
三菱機器 (第十四製作所)	中等学校	男450	府立第五中学	3・4	442	
		女500	家政高女 嵯峨野高女 技芸高女	3・5 3 4	331 145 150	
	国民学校	男250	嘉楽 嵯峨 西院 御室	2	97 54 92 79	
		女100	嵯峨 御室 西院	2	31 66 80	
日本国際航空大久保工場	中等学校	男320	市立第三商業 市立第二工業	5 4・5	131 200	
		女700	京都女子学園 平安女学院 桃山高女	3・5 4 3・5	507 129 233	3年工場化 工場化
	国民学校	男300	伏見 田辺 寺田	2	181 31 22	
			大久保 久津川 富ノ荘 佐山		17 7 25 14	

(注) 京都府『学徒動員学校配当一覧』(1944年10月)から作成。

四月一六日、七月二四日それぞれ空襲を受けた三菱重工業第十四製作所、日本国際航空工業大久保工場においても、一九四四年一月一八日決定の「緊急学徒労働動員方策要綱」、四月一七日の「学徒動員に関する文部大臣訓令」、八月二三

日発令の「学徒勤労令」にもとづく通年動員がおこなわれていた。多くの少年少女たちが日本へ勝利をもたらすための生産活動にたずさわっている最中に、空襲を目撃したのである。時期は一九四四年一〇月であるが、京都府が作成した「学徒動員学校配当一覽」^②によると、両工場への動員状況は、表1のとおりである。

以下、両工場に動員された学徒の証言から、工場での生産活動や空襲の実態を考えてみることにする。

1 三菱重工業第十四製作所

四月二九日付『京都新聞』には、「焦土に制服乙女は戦ふ工場再建へ」という見出しで、壊れた旋盤をかたづける女生徒たちの写真が載っていて、「○○製作所」とある。この「○○」は、三菱重工業第十四製作所であり、空襲後一〇日以上たつてはいるが、被災状況を確認できる貴重な写真である。「一刻も早く焼跡を整理して工場の再建をと唇を噛んで挺身する乙女達」と一緒に、後述する工場分散の大きな要因となる旋盤の破壊された様子を大きく写し出している。

京都女子学園発行の『東山タイムス』所収の「京女口伝」

(一九五八年一〇月一〇日付)には「四年生が絶縁体・精密機械など飛行機部分品の制作に当った。よく頑張って作業成績もよく、出勤率は九九%。のち桂・塚口などにも分散して

いたが(中略)遂に清滝のトンネル工場にまで追い込まれた」とあり、空襲後の工場分散に伴って、工作機械などと一緒に学徒が移動していたことがわかる。

京都府立第五中学校の生徒は、『京五中創立四十周年記念誌』に「われわれのクラスも京五中第二中隊第二小隊第四分隊と名称が替わり」と記しているように、軍隊同様の中隊方式で統制され、昼夜三交替の二四時間体制で生産に従事していたのである。

また空襲後の四月二五日には早くも工場分散により、同校が学校工場となり、そのため講堂の床板、北校舎の階下の床板がはがされたということである。

彼ら動員学徒数は、五月段階で全従業員六八五〇人の約四〇%に達したという。

第十四製作所の南側にある大秦小学校で教師をしていた人が、「アメリカ軍がこれ(飛行機部品の生産)を探知して、広い街の中の小さい工場に命中させたことには度肝を抜かれたのだ」と回想しているように、空襲された側は、アメリカ軍が第十四製作所を目標として爆弾を投下したものと受けとめていたのだった。

だがアメリカ側によると、偶然に爆弾を投下した臨機目標というのである。機体のトラブルによる投棄かもしれない、その真相は不明なのである。ところが、結果としては軍需工

場への投弾という効力をうみ、地上では恐慌的工場分散を引き起こすのだが、あくまでアメリカ軍の意図とは無関係であった。

2 日本国際航空工業大久保工場

一九四四年六月二四日から平安女学院の学校内裁縫教室などを大久保工場の学校工場として使用しはじめ、二三台の製作機械や飛行機部品の製作材料が搬入された。学校工場では「高女五年生が白鉢巻、モンペ姿も甲斐々々しく汗と油にまみれてか細い腕に重いハンマーをふるい、馴れない旋盤と取り組んで重労働に従事した」という^④。また高女四年生、女子挺身隊は大久保工場に出勤した。

京都女子学園では、高女五年生が大久保工場に出勤していたが、一九四五年六月文部省の通牒を受け、給品部前校舎の廊下教室、四・五・六校舎、雨天体操場でジュラルミン製部品（パイプ）をつくり、バイス台を置いて旋盤作業もやり、ネジもつくったという^⑤。

国民学校では一九四四年一〇月一日、高等科二年生男子（伏見、小倉、久津川、寺田、富野、佐山、田辺、大久保）が動員され、中学生、女学生、女子挺身隊と一緒に胸に⑥のマークを付け、航空機の部品製作に従事した。

一九四五年八月一五日現在の日本国際航空工業大久保工場

の従業員数をみると、学徒二三〇二人、女子挺身隊二七人、合計二六一九人で全従業員九七三八人の約三割を占めている^⑥。ここでも軍需生産に生徒の大きな力を借りていたのである。

七月二四日の空襲によって、この大久保工場では挺身隊や学徒動員で働いていた桃山高等女学生六人が死亡している。

『かくされていた空襲』には「女性ばかり六、七人がその便所に隠れていて全部死にました」と回想談が載っている。

これについて『京都新聞』では、「或る工場では監視と敵情伝達が極めて正確に行はれてゐた関係から、退避命令が迅速に徹底したので、附近に数発の爆弾が落下したが、退避壕に駆け込んだ者は全部無事であつた。動作の緩慢なものや命令を聞いてから便所へ這入つた者など、正確に退避しなかつた者が損傷を被つた程度^⑦」として、空襲の被害は軽微なものであり、退避命令に従って素早く行動し、退避壕に入っていれば、被災は防げると断言していたのである。被災者やその家族を無視したこの記事の内容は、空襲後、桃山高女の関係者のあいだに『かくされた空襲と原爆』に記されているように「厳しい箝口令」がしかれたことにも共通する姿勢であつた。府民の動揺をおさえ、治安維持をはかろうとする当局の厳しい取り締まりの目がひかっていたのである。

さてこの年の府内全体の学徒動員状況は次のようであつた。いずれも四月二〇日現在の数字である。中等学校は一二六校、

三万七六八八人が三六六工場で働いていた。内訳は、府内二五七の工場に一〇四校、三万三一九七人が、府外九工場に二二校、四四九一人である。国民学校は八三校、七七三四人が府内八五工場で汗を流していたのである。

三 朝鮮人の徴用

空襲を経験した三菱重工業、日本国際航空工業、栗村鋳業所では、「集団移入労務者」すなわち、朝鮮半島から強制的に連行されてきた朝鮮人たちとどのようにかわっていたのであるうか。軍需工場に重点的に割り当てがおこなわれた関係上、当然これらの工場への徴用もおこなわれたのである。

一九四五年六月一日現在、京都府内に強制連行されてきた朝鮮人の状況は表2のとおりである。

三菱重工業京都発動機工場とは三菱重工業第八製作所のことであり、第八製作所と地下工場建設に従事したものである。一九四二年九月から、現在の陸上自衛隊桂駐屯地付近に海軍の要請を受けた三菱重工業によって、官設民営の工場建設が始まり、朝鮮半島や日本各地の炭鉱などから朝鮮人が集められたのである。栗村工業所では、和知、大谷両鉱山において原料となるタングステンの生産に従事していた。

移入数と現在数の違いは、そのまま徴用先からの逃走を意

表2 強制連行された朝鮮人の状況(1945年6月1日現在)

受 入 先	移入数(人)	現在数(人)
大江山鉱山	383	81
栗村鋳業所和知鉱山	49	48
“ 大谷鉱山	47	47
日南鋳業鐘打鉱山	50	18
飯野産業舞鶴支店	164	152
日通東舞鶴出張所	53	39
佐藤工業舞鶴出張所	100	87
三菱重工業京都発動機工場	227	220
舞鶴海軍施設部(含工廠)	3,800	3,500
合 計	4,873	4,192

(注) 京都府「新居前知事・三好知事事務引継演説書」(1945年6月)から転載。

味しており、逃走防止の方策や指導訓練をおこなってもその数が減ることはなかったようである。そのため三菱の工場、栗村工業所鉱山では、それぞれ一〇〇人の移入労務者をその後受け入れることになった。

逃走があとをたたない朝鮮人の当時の悲惨な労働状況について、国民学校卒業直後和知鉱山に就職し、その苛酷な生活を目のあたりにした人が、戦後次のように語っている。

日毎に鉱山の建物も出来上がり、陣容が整ってくると同

時に、山の奥の方に大きな宿舎が出来上がると、朝鮮より徴用工と云って坑内作業に携わる人々が五〇名ほど同じ朝鮮の親方に連れられてやって来ました(中略)これらの人々は山奥の宿舎に泊り、作業中以外は一步も鉱山の区域外へは出られず、まるで奴隸同様で、坑内作業は草で作った蓑や紙を圧縮して作ったカッパのような帽子をつけ(中略)頭から小麦粉をかぶったように白くなつて作業をし、粉じんでひどいものでした(中略)こうした作業に耐えきれず、故郷恋しさもあつて脱走する人がありました。

草でつくられた蓑をはおり、カッパのような帽子をかぶるだけという裸同然の姿での坑内作業、しかも水を使えない削岩作業は、絶え間なく裸の体に白い粉を積もらせ、体をむしばんでいった。宿舎と坑内の往復だけの毎日、まさに奴隸同様の生活であつた。彼らがその状況から逃れるためには、脱走しか方法はなかつたのである。

日本国際航空工業では、その工場および試験飛行場建設のために朝鮮人労働者を受け入れていた。隣接する通信省管轄の京都飛行場建設と共に京都府に依託し、京都府が敷地の整備工事を執行していたのである。二年計画で一九四〇年に始まった工事が、資材入手の關係で一九四五年になつても継続しておこなわれていた。そのあいだに建設工事に従事した朝

鮮人の数は千三百余人戸も何千人ともいわれている。彼らは、当時「どこに連れて行かれて何をさせられるかわからない、生命の保障はない」と思われていた徴用でなく、「ここに来れば徴用がない」と日本人に誘われて来た人が大半であつた。しかし、実際の労働状況は徴用と何ら変わるところはなかつたのである。

大林組、竹中組など組別に飯場があり、女性はその世話をし、男性は土木工事に従事していた。組ごとにいる日本人監督が木刀を持って監視し、脅かしながら働かせていたという。空襲は、「多い時は一日に四回も五回もあつてね。そのたびに防空壕に逃げましたよ」という防空壕も日本人と朝鮮人別々に分けられていたのである。

四 京都三菱重工業の工場疎開

工場疎開は、一九四三年一〇月一五日閣議決定された「帝都及重要都市ニ於ケル工場家屋ノ疎開及人員ノ地方転出ニ関スル件」の要領一、「工場化屋等ノ疎開及人員ノ地方転出ハ差当リ京浜、阪神、名古屋及北九州地域ニ属スル重要都市ニ付之ヲ実施スルモノトス」に始まっている。一九四四年になると航空会社それぞれが自発的に地下作業に適する場所を調査し、一部の地下工場の建設を始めるようになる。

一九四五年一月二五日、最高戦争指導会議でまとめられた「決戦非常措置要綱」の「生産防空態勢ノ強化」の二、「生産防空態勢ノ急速活発ナル促進ヲ期スル為先ツ分散疎開ヲ急速概成スルト共ニ重要ナルモノハ地下施設ヘノ移行スルモノトス」で初めて政府による施策が具体化することになった。

同年二月二三日「工場緊急疎開要綱」が閣議決定され、そのその方針に「戦局ノ状勢ニ鑑ミ一時ノ不利ハ之ヲ忍ビ計画的、系統的ニ工場疎開ヲ徹底実施スルモノトシ効果的ニ分散、地下施設等ノ方法ヲ講ズル」と明確化され、政府命令による工場疎開が実施されることになったのである。同年三月、生産と防衛に関する中央の対策本部が軍需省に設置され、航空機および同部品工場は疎開計画の最優先順位に置かれることになった。そして四月四日、疎開に関する命令が各社に到達されたということである。

さて京都三菱重工業への疎開の影響は、名古屋から工場と従業員が疎開してきたことに始まっている。名古屋にある三菱重工業名古屋発動機製作所は、一九四四年一月一三日の初空襲以来、同月二二日、翌年一月二三日、二月一五日、三月二四、二五日、三月三〇、三十一日、四月七日と度重なる爆弾投下によって完全に機能を停止したため、京都への疎開をおこなうことになった。

米国防略爆撃調査団報告「大阪、神戸、京都に対する空襲

の影響」によると「京都郊外の山科にひな型エンジン工場が設立される間、京都のある大きな学校に移動された。他の中学校にも工場が設立された。五月一日名古屋からの移動は事実上完成し、大量生産が開始された」とある。ただ従業員が名古屋にいる家族をしばしば訪ねるため、彼らの不在の割合は極端に高かったし、京都の労働者とのコミュニケーションは困難であったようである。「三菱重工業社史」では、「京都発動機製作所は名古屋発動機製作所第三工作部の生産を設備と共に引継いだ」として、京都市南西部に位置する桂にある京都発動機製作所への疎開を記録しており、「山科」ではなく、「桂」の誤りであろう。

1 第十四製作所の疎開

「大阪、神戸、京都に対する空襲の影響」では、「その設備へのダメージはさほど重要ではなかった。しかしこの近代的な極めて危機をはらんだ工場への更なる空襲が予期されたのである。実際に取替えが不可能な全ての設備が続く六週間のあいだに移動された。分散のための行動は、爆弾投下後直ちに始められたが、それは一時しのぎの事柄だった。設備や貯蔵物は、ほら穴、トンネル、鉄橋や様々な建物に移された」と記述されている。

前掲「三菱重工業会社」では、「第二機械工場は決して修

繕されなかった（中略）物質的なダメージは比較的軽かったが、弁を生産していた第二機械工場の生産活動は全て停止した。多くの切れ目のある旋盤は、すぐに取替えることはできなかった」とあって、工場建物全体へのダメージは少なかったものの、排気弁生産には欠かせない「マルチカット・ラス」(Multicut lathe)の損傷が大きく、第二機械工場の生産が停止したことを記している。四月一六日以降の空襲を予測し、排気弁の完全な生産停止を防ぐために、工場分散を実施することになったのである。

分散について同報告は、「主要な生産活動の太秦からの分散は、四月一六日の空襲の直接的結果として軍需省によって命じられた。一九四五年五月、この工場は四つの国民学校、中学校の工場、西方寺工場、周山工場、釈迦堂工場、清滝にある地下トンネル工場などに分散された」としている。学校工場とは、高尾国民学校、大将軍国民学校、京都府立第三中学校、第五中学校の四校である。

これら分散工場の代表として、米国防略爆撃調査団報告「日本航空機の地下生産」から大谷、清滝両工場について要約してみよう。

大谷工場

大谷は三菱第八、十四製作所の分散工場であり、京都の東六マイルの都市大津の南西一マイルに位置する大谷に

あった。それぞれ長さ二一六〇フィート、二二〇〇フィートの二つの破棄された鉄道のトンネルは、先の工場のため、歯車をカットしたり、みがいたりする工場として使われた。三六種類の歯車が第八製作所に属する二八六台の工作機械と第十四製作所に属する二五台の工作機械によって生産された。工作機械の取付は一九四五年三月一六日に始まり、四月には完成された。十分な生産が約二ヶ月半のあいだ遂行された。総計七〇〇人がこの工場に雇われていた。従業員の多くは「とても勤勉だが決して良すぎることがない」女生徒たちであった。機械工場の半分以上の従業員は女生徒であった。

清滝工場

清滝は三菱第十四製作所の分散工場であり、京都の五マイル西方にあり、二つの破棄された市街電車のトンネルの中に位置している。その工場は大谷工場にとてもよく似ている。一九四五年五月、大谷ができてちょうど一〇日後に生産が始まった。そのトンネルは長さ一九七〇フィートで一二〇台の工作機械が備えられた。排気弁の生産がここでの唯一の生産活動であった。

大谷工場は、『三菱重工業社史』によると、逢坂山トンネルにつくられたことになっているが、京都府と滋賀県の境に

あるこのトンネルがどの鉄道に所属するものかは、今のところ不明である。清滝にある破棄された市街電車のトンネルとは、嵐山駅を起点とし、清滝からケールブルによって愛宕山に登るという一九二九年に開通した愛宕山鉄道のトンネルのことである。太平洋戦争中の鉄材不足の余波を受け、供出を余儀なくされ、一九四四年二月平坦線もろともに撤去されることになったのである。

鉄道の古いトンネルを利用した地下工場は、全国で五例しかなく、トンネル工場のほとんどは強制連行された朝鮮人労働者たちによって新しく掘られたトンネルであった。このことから京都の三菱地下工場は、既存の計画にもとづかない、空襲によって急拠つくられたものであったことがよくわかるのである。前掲「三菱重工業会社」にも「Panic dispersal」という表現で記されているように、まさに恐慌的分散であった。

また学校工場だけでなく、これらの分散工場には、多くの動員された学徒や挺身隊の女性が働いていたことも推察できるのである。

2 第八製作所の疎開

前掲「空襲の影響」によると、一九四五年四月には、京都近郊の他の建物や学校への一部機能の分散が命じられていた

ようである。第十四製作所への空襲は、第八製作所の疎開活動を急がせることになった。「生産を持続させるためのゆるやかな規則正しいスケジュールに従うかわりに、この会社は学校や鉄道の陸橋下やデパートの地下への分散に突進した」と記されている。

四月一六日のB 29一機による爆弾投下は、第十四製作所の工場分散を引き起こしただけでなく、第八製作所の工場疎開計画を混乱させ、京都の三菱重工業全体をゆるがせたわけである。

分散工場の代表として、桂工場について米国防略爆撃調査団報告から要約してみよう。

桂工場

三菱第八製作所の桂工場は、京都の南西にある桂駅の四分の一マイル北にある豆田に位置していた。完全な地下工場とはいえないが、工場を隠し、守るために鉄道の陸橋を利用した。鉄とコンクリートでできた橋脚に泥壁をこしらえ、二万五〇〇〇平方フィートを囲った。七二台の工作機械を備え、一九四五年五月から生産を開始した。火星二五型エンジンのマスター・ロッドを製造した。航空写真を見ても、この工場を発見することは無理だったであろう。

桂工場は、阪急嵐山線の高架下を利用するという日本で唯

一つ、鉄道の陸橋を使ったユニークな分散工場であった。このほか大丸デパートでは、地下を利用して一七〇台の工作機械を入れ、発動機部品を製造していた。

おわりに

戦後、意図的に文化都市京都を守ったことを強調するアメリカ軍に対し、その政治的意図を告発せんがため、京都を爆撃目標とした空襲の存在を追及する方向が打ち出されてきた。それは、一九七四年刊行の『かくされていた空襲』以降、顕著な傾向である。

もちろんアメリカ軍の政治的意図は明白である。しかし、京都空襲の実相を明らかにするためには、日本とアメリカ双方の公式記録をできる限り収集して、慎重に検討することが必要なのである。

現在までの京都空襲研究は、本稿で指摘したように「米国戦略爆撃調査団報告」すら見ないで論じてきた。「京都府の空襲」一覧表が載っている「京都における空襲防ぎよと関連事項に関する現地報告」をはじめとして、四月一六日空襲については、「大阪、神戸、京都に対する空襲の影響」、「日本本の航空機工業」、「三菱重工業会社」などの「戦略爆撃調査団報告」を検討していないし、六月二六日空襲にいたっては、

「戦術作戦任務報告」を無視しているように思える。これらのアメリカ側資料は、いずれも早くに公表されていたものである。

本稿では、これまでの京都空襲研究の不備をうめ、京都空襲の実相を明らかにすることが目的であったが、研究をすすめる中で、四月一六日の三菱第十四製作所への投弾が勤労動員の生徒を巻きこんだ工場疎開へと、大きな影響をおよぼしたことがわかり、その検討に多くの枚数をさくことになった。四月一六日の空襲とその影響について、また京都空襲下の人々の暮らしなど今後の研究の課題にしたいと考える。

注

- ① 京都府「三好前知事、木村知事事務引継演説書」一九四五年一月、京都府立総合資料館所蔵。
- ② “Field Report Covering Air-Raid Protection and allied Subjects in Kyoto, Japan.”この報告は一九四七年二月に刊行され、一九六〇年に航空自衛隊幹部学校が訳出しているが、本稿では引用者が翻訳したものを載せている。なお空襲の犠牲者は死亡二二〇人、重傷一四七人、軽傷三六六人であり、不動産については民間建物四四四件、軍の施設一八件、工場六件の損害となっている。
- ③ 京都府「新居前知事、三好知事事務引継演説書」一九四五年六月。

- ④ "Effects of Air Attack on Osaka-Kobe-Kyoto," (1947.6)
- ⑤ "Mitsubishi Heavy Industries, LTD." (1947.6)
- ⑥ "Security-Classified Statistical Reports Covering Allied And U. S. Air Forces Attack Data," 1945-46, 50 binders. 2ft.
- ⑦ 四月一六日正午の京都空襲はグリニッジ時間においても四月一六日であり、前掲のアメリカ軍「統計報告書」の神戸への投弾記録が京都空襲の記録である可能性は、いぜんとして残っている。搭乗員が投弾地点を誤認することはしばしばあることであり、報告書に残る記録も同様だからである。
- ⑧ 京都府『府政だより・資料版』二〇〇号、一九七二年九月、一〇頁。
- ⑨ 富永謙吾編『現代史資料(太平洋戦争五)』(みすず書房、一九七五年)所収、翻訳文三三四～三四二頁。なお「間接攻撃」とは、航空機工業を目標としない空襲の際、航空機工場に投弾があったことをさしている。
- ⑩ 前掲「大阪、神戸、京都に対する空襲の影響」
- ⑪ 「同右」
- ⑫ 航空用語研究会『絵でみる航空用語集』(産業図書、一九九三年)、二五五頁。
- ⑬ 『三菱重工業株式会社史』(一九五六年)、六六一頁。
- ⑭ 防空法第三条「主務大臣ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ防空上重要ナル事業又ハ施設ニ付行政庁ニ非ザル者ヲ設定セシムルコトヲ得」にもとづいて、指定を受けたのは、島津製作所三条工場、寺内製作所寺内製作工場、寿重工業京都九条工場・京都十条工場、日本電池九条工場・西大路工場、京都瓦斯第一・第二工場、奈良電気鉄道の九施設である。以上の記述は「知事事務引継演説書」一九四五年六月による。
- ⑮ 『西陣警察署沿革録』以下の「」は『府政だより・資料版』二〇〇号、一一頁。
- ⑯ 六月二六日の京都空襲は、臨機目標への投弾であり、大空襲の付随的、投弾的爆撃であることは、小山仁示『改定 大阪大空襲』(東方出版、一九九三年)二五八頁で指摘されている。
- ⑰ 出水校百年祭記念事業実行委員会『出水校百年史』(一九六九年)、三八七頁。
- ⑱ "Action Report-Operations Against Japan-2July-15 August, 1945 (The main report for pre-invasion air strikes jap home islands)" 1945. 8. 31. 石井勉『アメリカ海軍機動部隊』(成山堂書店、一九八八年)所収、翻訳文による。
- ⑲ 『同右書』九七頁によると、当日舞鶴は攻撃目標ではなかったが、「目標の東京平野北部は悪天候のため変更された」ということである。
- ⑳ これら被害状況については、京都空襲を記録する会・京都府立総合資料館共編『かくされていた空襲——京都空襲の体験と記録』(一九七四年)と宇治市『宇治市史』第四卷(一九七八年)八一頁による。
- ㉑ 近畿日本鉄道株式会社『奈良電鉄社史』(一九六三年)、八〇頁。
- ㉒ 『京都府公報』一八九一号、一九四五年七月二四日。

②③ 『同右』一八九三号、一九四五年七月三十一日。

②④ 田辺町『田辺町近代誌』(一九八七年)、二六五頁。そのほかに多賀小学校『創立百周年記念誌』(一九七二年)、『城陽市史』第二巻(一九七九年)にも同様の叙述がある。

②⑤ 『かくされていた空襲』、二〇八頁。

②⑥ 地元でB29墜落事件を調査している北村武弘氏が聴取された証言による。憲兵に連行された搭乗員は、いずれも帰国していないということであり、伊勢田への墜落の生存者も同様である。なお伊勢田での墜落時は、搭乗員の殺害もあったらしい。津市の雲井保夫氏の調査によると、この日、三重県名張にパラシュート降下したB29搭乗員五人全員が、六月末までに東海軍によって処刑されている。中部軍管区内に降下した三人の運命も同じであったと思われる。

②⑦ 『京都新聞』一九四五年六月六日付記事。

②⑧ 「知事事務引継演説書」一九四五年六月。

②⑨ 『京都女子学園八十年史』(一九九〇年)、七三〇～七三二頁、

「資料一九 戦時下の学生生活」。

③⑩ 京都府立京都第五中学校同窓会『記念誌』(一九八一年)、一〇六頁、長谷川正幸「わが五中時代を回顧して」。

③⑪ 『同右書』、三三五頁、年表。同書には、学校側が工場に対して、学徒の労働条件などについて要望を出していたという記述もある。

③⑫ 前掲「大阪、神戸、京都に対する空襲の影響」。

③⑬ 思い出を綴る会『私たちの大東亜戦争』(一九八五年)、二五頁、出野三次「大東亜戦下の若き国民学校教師の思い出」。「」の中

の()は引用者による。

③⑭ 『平安女学院八十五年史』(一九六〇年)、一七二～一七三頁。

③⑮ 京都女子学園『前掲書』、一二五頁。

③⑯ 日産車体株式会社『日産車体三十年史』(一九七二年)、一五頁、「従業員一覧」による。

③⑰ 『かくされていた空襲』、二〇二頁、大久保「日本国際航空」の空襲。

③⑱ 『京都新聞』一九四五年七月二五日付記事。

③⑲ 「知事事務引継演説書」一九四五年六月。

④⑩ 『京都新聞』一九九一年二月一～四日付記事「解放への日々」を参照。

④⑪ 「知事事務引継演説書」一九四五年六月。

④⑫ 思い出を綴る会『前掲書』、三九七～三九八頁、畑中光好「懐かしい思い出」。

④⑬ 「知事事務引継演説書」一九四五年一〇月。

④⑭ 朝鮮人強制連行真相調査団編『強制連行された朝鮮人の証言』(明石書店、一九九〇年)一二五～一三一頁、「宇治・京都飛行場」。以下の記述は、おもに飯場で食事の世話をしていた文光子さんの証言による。

④⑮ 東京空襲を記録する会『東京大空襲・戦災誌』第三巻(一九七三年)、五一五～五一六頁所収。

④⑯ 『同右書』、四八八～四九一頁所収。

④⑰ 『同右書』、五二三～五二三頁所収。

④⑱ 米国防略爆撃調査団報告「日本の航空機工業」、富永謙吾編

『前掲書』、一四九頁。

④ 日本空襲編集委員会編『日本の空襲』第五卷（三省堂、一九八〇年）所収、「名古屋市空襲被害状況一覧表」による。

⑤ 『三菱重工業社史』、三四七～三四八頁。なお京都発動機製作所は第八製作所に、名古屋発動機製作所は第四製作所に、京都機器製作所は第十四製作所にそれぞれ一九四五年二月、三菱重工業の職制改正で改称している。以上は、『三菱社史』四十、（東京大学出版会、復刊）による。

⑥ “Underground Production of Japanese Aircraft” 中の Underground Plants of Mitsubishi Aircraft Co. (1947.3)

⑦ 京福電気鉄道株式会社『京福電気鉄道三〇年史』（一九七二年）三九頁。京阪電気鉄道株式会社『京阪七〇年のあゆみ』（一九八〇年）、八三頁。

⑧ 富永謙吾編『前掲書』、一五頁、「地下工場用地の種類」。

⑨ 「日本航空機の地下生産」。

（関西大学卒業生）